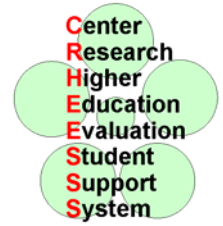


週刊センターニュース No.183



第183号(2007年11月19日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第165回共同学習会のご案内 ○●○

日時: 2007年11月22日(木) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

報告者: 堀井祐介(大学教育開発・支援センター)

テーマ: 東京工業大学学術国際情報センター(GSIC)講演会 2007 No.04 「テニユア tenure とは—MIT (マサチューセッツ工科大学) の場合—」参加報告

趣旨: アメリカの大学で運用されているテニユア制度について、その重要性、運用実態について聞いてきた内容を報告するとともに、テニユア制度の本質は、任期制ではなくであるアカデミックフリーダムの維持にある点についても確認したい。

○●○ 授業方法の具体的改善に向けて—筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター ○●○

10月20日(土)、筑波技術大学において第3回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムが開催された。主催者は、同大学と日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)である。PEPNet-Japanについては、本誌で何度も紹介し、標記シンポジウムについてもその第一回を第91回共同学習会(05年10月20日開催)でとりあげた。この組織から本学の学生支援が貴重な情報提供を受けてきたことは、学生部発行の『障害のある学生へのサポートブック』2007年版を見ても明らかである。今回は、FDセンターとして位置づけられる、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターを紹介する。

筑波技術大学は、前身は1987年に創立された筑波技術短期大学であり、聴覚・視覚に障害を持つ人を対象とした唯一の国立大学(05年10月より4年制)である。聴覚障害者のための産業技術学部と視覚障害者のための保健科学部の2学部からなるが、大学教育改革の点から注目したいのが、障害者高等教育研究支援センターである。

センター障害者支援研究部のHPはまず、「障害による学習上の困難を出来るだけ解消することと、授業に当たってより効果的な教育方法を採用することが必要です。そのために、障害者支援研究部では先端技術を応用し、学習効率の向上を目指した障害補償機器やソフトウェアの開発、既存のシステムの評価等を行なっています」として、学内の学生やスタッフを支援することを謳っている。同時に、「聴覚活用・手話・発音といったコミュニケーションに関する指導と支援、職域の開拓、そして学外支援、特に一般大学に学ぶ聴覚障害学生への支援も行っています。国内のみならず諸外国の障害者のための大学や障害者の高等教育を支援する諸機関の研究者や関係者と積極的に交流を行い、日本と世界の障害教育の発展を目指した活動を行っています」と記しており、聴覚に障害のある学生を受け入れている他の大学の支援をも使命としているのである。

周知のように、大学設置基準は各大学に対して「授業内容及び方法の改善を図るための組織的な研

修及び研究」(FD)を新たに義務付けた。具体的には、全入とまで言われる状況の中、多様化する学生を受け入れる以上、各大学は、例えば、聴覚に障害のある学生の入学を前提に、他の学生と同様の教育成果を得るための学習環境を整備しなければならない。授業におけるノートテイク制度を用意する、従来までの学生支援では対応できない新たな支援についての教職員研修を行う等の義務が大学に課されたことになる。また、各教員は聴覚に障害のある学生がいることを前提として、授業の内容・方法の見直しを行わねばならない。健聴者のみを受講生とする場合と同じ授業をすることは許されず、本来的にも、授業における情報保障を抜きにして、大学が明示した教育目標の具体化や厳格な成績評価(これらも大学設置基準で明記)を行うことは、ありえないことである。

この観点からすれば、筑波技術大学のセンターは、これからの高等教育機関全てにとって、貴重なFD研修・研究拠点たるべきことを期待されることになる。今回、及川力センター長から直接お話をうかがう機会を得たが、シンポジウムにおけるセンター長挨拶からも、このような意味でのFDのナショナルセンターたるべき期待に応える体制を整えつつあると実感した。(実際に本学も、3年前、聴覚に障害のある学生への授業情報保障の制度化にあたって、同センターの白澤麻弓准教授に色々と助けていただいた。)

丁寧な学習支援・学生支援を行っていくためには、先行大学の経験に学ぶだけでなく、大学教育改善のためのセンター所属の専門家たちからの、研究を前提とした情報を活用することがどうしても必要となる。実効性のあるFDによって大学教育力を高め「学士力」全体を底上げするには、それぞれの大学の取り組みだけでは限界があることは明らかだからである。

教育内容については各専門分野の学会等による改善の取組に期待するところが大きい(これについては、医学教育学会の例をすでに本誌で何度か紹介してきた)、同様に、授業方法については特に、それぞれ特長を備えた大学教育のセンターが、同種の課題を抱えた高等教育機関に向けて、研究成果を有用な情報として提供することを求められている。とりわけ障害のある学生への支援は、一朝一夕で準備できるものではない。試行錯誤は当該の学生から貴重な学習機会を奪うことを意味するのであり、研究にもとづく合理的な支援体制を時間をかけて整備し、障害のある学生がいつ入学しても、その日から支援を行うことがどの大学にも求められる。筑波技術大学のセンターは、こうしたことに習熟していない多くの大学にとって、最も頼りになるFDセンターとなりえる。

なお、PEPNet-Japanの編集により、『大学ノートテイク支援ハンドブッカーノートテイクの養成方法から制度の運営まで』が人間社より、先月公刊された。それに併せ、PEPNet-Japanのホームページ(筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターのHPからもリンク)では、「座談会：ノートテイクから始める開かれたキャンパスづくりー『大学ノートテイク支援ハンドブック』著者が支援の奥義を語るー」が掲載されている。これからの聴覚障害学生支援の基本書となる書物がどのような意気込みで書かれたのかが分かる。是非ともアクセスを試みていただきたい。

(文責：教育支援システム研究部門 青野 透)

○●○ 大学教育学会 2007年度課題研究集会のお知らせ ○●○

標記研究集会が、「学士課程教育の再考」を統一テーマに、12月1日(土)、2日(日)の両日、龍谷大学深草学舎3号館(京都市伏見区深草塚本町)にて開催されます。安原義仁広島大学大学院教育研究科教授による特別講演「イギリス教養教育の源流を訪ねてー学士課程の理念と構造ー」に始まり、初年次教育、理系学士課程教育、FDのダイナミクスについてのシンポジウムのほか、龍谷大学の障害者教育(特色GP)を紹介するセッションなど盛り沢山です。当日参加(一般5000円、学生1000円)も可能です。大学教育改革に関心をお持ちの方々の積極的な参加を期待します。